

特 250

354

加爾其集



始





特230  
354



# 世三間堂棟由來



## 世三間堂棟由來

### 目次

平太郎住家の殿	一三
阿 註釋	一三
○	
世三間堂棟由來總書	一六



解附 義太夫名曲全集  
稽古本

### 卅三間堂棟由來

#### 平太郎住家の段

夢やむすぶらん妻は傍を立退て、奥を覗いつ立戻り、おづく  
傍へ立寄てゆり起せ共夫は寢付の高軒風が持くる斧の音伐  
木とうく〜てうくと、木を伐る音やこたへけん、お柳は身内



の苦しみを、じつとこらへて立寄れど、得も岩代の結び松、我は  
柳の緑子が顔を詠めつとつ置つ、漸に氣をしづめ、

『オ、それよ互に顔を見て居ては、身のうへ語るも面はゆし、  
寝入り給ふを幸に、今自が言残す必ず夢と思さずと、白地に聞  
てたべ。ノッ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫  
婦と成る事も一方ならぬ因縁ぞや、先の生にて誓ひたる契り  
を結ばん其爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受けて、夫婦と  
成しも五とせの春や昔の春の比、季仲が鷹狩に鷹の足緒にか  
ゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯なん此柳、其時お前が  
一矢の手柄鷹を助けて、葉柳の枝に障りもアレ、くく又もや

爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るかと思へば、やる方詮方も、  
なくく見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠れや、亂るゝ心おし  
鎮め、

『其時の情の恩送る月日も、かさなりて、柳の花のコレ此緑丸、  
最早今年で五年の春秋の重なれば、乳がなくと育つべし。成  
人の後々は、父の弓矢を請つたへ、潔い名を上げてたも、ヤヤ、母  
は今を限りにて、元の柳に歸るぞや、必ず草木成佛と回向を頼  
む夫よ子よ、はなれがたなや悲しやといふ聲さへも、忍び泣立  
て見居て見聲上げて、わつとばかりに泣叫ぶ音に、目覺す平太  
郎扱は夢共現共、聞しは誠で有けるか、何迎つれなくやるべき



ぞと抱き留れば一間より老母も俱に轉び出

「様子は聞たコレお柳嫁女なふ」と呼ぶ聲もちりくる柳の葉隠れに形は消て失にけり。そこよ爰よと母と子が尋る音に縁丸

「かゝ様どこへ行しやつたかゝ様のふく」

かゝ様と父が後に駈廻り尋ね迷ふ稚子を見るにたへかね爺親も縁が母やい。嫁女のふ。かゝ様と聲をはかりに三人が尋ね廻れば道にも引るゝ心執着の又も姿を顯はす有様「アかゝ様か」とかけ寄る稚子夫も涙の聲を上げ

「非情の草木といひながら情有ばこそ是迄に睦じくも馴な

じみ一人の若を設し身が何逆ふり捨歸りしぞせめては母を見送る迄俱に介抱してくれよ」と託ち歎けば漸にしほるゝ顔をふり上げて

「傳へ聞く安倍の童子が母上も丁ど我身と同じ事一人の子を残し置信田の古栖に歸りしとやそれは野干の年ふる身我は元より草木の歸る古栖の柳は今切崩されて枯柳歸るといふは消る身に何とて形を残すべき哀と思したまはれよ白河の法皇の御惱煩とて都の使來りつゝ我身を切捨て申すなり。最早枯木も時を得て一字の棟と成る事も一ツは妙なる法の縁佛果に連し縁有は情の恩を報ぜん爲一ツの筐參らすると



平太郎が手に渡し、

「夫こそは白河の法皇の前生の御頭也。夫を手がらに御身の上再び出世をなし給へ、必々縁が事お頼み申參らする。エ、くはなれがたなや可愛やなア。アレく風の音に連れ、柳の絲を切拂ふ斧鉞がてうくく、笥は爰に玉きはる時こそ來れいざさらばさらばくの聲の下姿は見へず成にけり。わつと斗に三人が闇より闇に迷ひつゝ互に手に手を取かはし、前後不覺に歎きしがなみだながらに平太郎、我子を膝に抱き上げ、

「ナア母人、我よりは此若が愛着に引かれて、嗚や名残の惜か

らん、たとへ姿は見へず共、柳は妻がなき佛、今一度此縁に見せもし、我も見もしたし、藏人とやらんにも對面せん、母人には此、憫憐佛間へ直し下さるべし、某は今直に忤を連て柳の元へ」

「オ、それく一時も早ふ孫を連て」

「ハ、ア然らば直さま、ナア縁よこい」と我子の手を引、二足三足、深山隠れの山寺に入相告る鐘の音かぞへながらもそろそろと探る足元見付る母、

「コレ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか」

「コレは、様と、様は目が見へぬはいのふ」

「ヤア、くそりやまあいつから」



『ハイさればでござります、一月餘ふと鷄目が起りましたが、女房にも言ふくめ、是迄はお隠し申した』

『エ、聞へぬ平太郎、さういふ事ならとくよりわしにも』

『ア、コレ何にもお構ひなさるゝな、したがお前にも此坊めも、マ今夜からさぞ便が』

『オイノ折も折とてそなたの眼病猶更わしも力がない。ア、アレくモアノ雪の降る事わいの、マア火を燈しませふ』

と行燈に手早く燈し提灯をうつし持たる緑丸蓑よ笠よと打着せて、

『そんならちよつと參つてさんじましょ』

『オ、怪我せぬ様に、ソレ縁よ手を引よ』

あいくく、あいろは見へぬ鷄目の父、杖は我子を力くさ柳が本へとたどり行く。母は佛間の看經に、鉦も幽に六字誦、風も身にしむ黄昏過、心の鬼の和田四郎晝の銜の豫てより、夜は山賊の大膽不敵、何でもほり出ししこだめんと、大だら差足、窺ひ足、ぎしつく疊の物音に、

『誰じやく』

『イヤ大事ない盗人じゃ』

『ヤア』とびつくりしながらも、『イヤモウ折角這入しやつても見込のない此内了簡して逝で下され』



『イ、コリヤ婆おれじや、晝來た者じやが見しらぬか』  
『ムウ、ナニ晝きたといやるからは』

『オ、畑主と云たはアリヤ嘘じや、山家のとろくに似合ぬ黄金十枚はハ、よい仕物、まだ臍くりが有である有たけそこへさらへ出せ、コリヤ命は助けてやるはいやい』  
と、鯉口ならしおどしける。

『エ、口惜い、夫と知たら其時は、やみく〜とはやるまい物、エ、平太郎は戻らぬかいの』

『エ、やかましいはいはい、コリヤモウどふですなをでは出しをるまい、搜してくれん』とかけ行くを、さうはさせぬと取付

くを蹴飛しく〜のつかのか、納戸を引出す古葛籠、あたふたあけて手に當る親子が着がへに包んだ大小鮫は鼠がまだ外に、御明し上た釣おまへ、備へし鬮體を見て恟り、どこやらぞ、がみ立退しが打點いて、

『コリヤ婆よ、葛籠に刀が有るからは浪人に極つた、ガ又あの鬮體は何の爲じや、サア夫ぬかせ』

『オ、あれはの息子が出世する大事の物じや』  
『ム、何じや出世するガ其出世が耳寄じや、コリヤ何者の鬮體じや、サアぬかせ、ぬかさぬかやい、ぬかさきにヤ斯うじや』と引抜く段びら、目の先へ差付れば、



「ア、いや〜、警ずだ〜に切れても云ぬ〜」

「ヤアどしぶとい老ばれめ骨をひしいで云する」と命もあら縄見付出し、がんちがらみにくる〜巻見上る燈籠の釣縄ほどき結び付たる猿縛り、

「サア〜ぬかせ〜」といふては引ばる釣縄に、次第にしまる縛り縄、血筋赤らむ葛梅命の蔓ぞ危ふけれ。

「ハ、ハ、ハ、もがくは〜、情のこはい根性から、いたいめを見をるはい、コリヤ下は滑の溜り池、氷の地獄じや、サアぬかせ〜」と責せつてう、老母は苦しき聲も出ず、降くる雪に争ふ白髪、眼につたふ血の涙見やる向ふに提燈の光に、恟り南無三と

縄を放せば眞逆様、水の溜へおちこちのむざん成ける次第なり。道の四郎もうろたへ眼表へ逃んも一筋道やり過して行んずと、庵の庭に身を忍ぶ、斯とは知ぬ平太郎、案内はいつも我門に常燈明の光さへ、提燈の火に緑丸、

「コレと、様佛様へとぼした行燈が落ちて有る」

「ヤアどれ〜、ホンニこりや落ちて有る、ふしぎ〜」と門の口、母者人申し、漸今歸りました、母者人〜、コレ〜緑よ、母人は見へぬか」

「アレ〜と、様ば、様が池へはめて有はいの」

「ヤアと驚き走り寄り、探り尋ぬる手先へさはる、縄を力に親と



子が漸にかづき上げ、

『コレく申母者人何者が此様に』

『ばゞ様イのふく』といへどこたへもあら悲しや、體は氷と冷切たり。こりや何とせふどうせふと、かけ出してはかけ戻り立たり居たり氣は半亂、エ、く、目が明たい開きたい鶏目は何の因果ぞと、母に取付身をもだへ、聲をはかりに歎きしが、『ハツアさうじや氷に溺れし體には、蒸を焼てあたゝむれば再び息を返すと聞く、オ、それよく』

と爺親が、差圖に蓑をかき集め、蠟燭の火を差よせて、心を焦す煙さへ、親子が心通じけん、うごめく體に猶も口寄せ、『コレお

心慥に、母人様く』と聲を限に呼生る。漸に目を開き、絲より細き聲を上げ、

『オ、平太郎孫もそこにか』

『ハイく縁も爰にをりまする、お心が付ましたか、モ何やつが此所爲』

『オ、何者とは晝來たやつが』

『ム、扱は街で有たるよな。シテくどつちへうせました』

『ア、コレく平太郎母が横死は定まる業隨分身をば大切に、曾根の苗氏を起しなば、是に上こそ悦びはない、隨分親子長生して、末の榮を見せてたも、それが冥途の土産ぞや、取分け不便



は孫縁今一度顔をと引寄せて、聲を限りのくどき言。可愛や  
 親には思はぬ別れ辨へなき子心にも、嘸や便なふ思ふてある、  
 可愛の者やいちらしや又一ツには嫁お柳かはいひ夫子をふ  
 り捨て、歸る柳は切崩され、魂宙宇をうろくくと、繼に引れ迷ふ  
 で有、コレくく魂家の棟放れずば、今一度姿をば見せてたも  
 と、くどき歎けば平太郎、けふはいかなる悪日ぞ、妻には別れ其  
 上に、天にも地にもかけがへなき、たつた一人の母人が、非業の  
 別れは何事ぞと、悔の涙はらくく、かゝる憂目を三熊野の  
 那智のお山の瀧津瀬も一度に落くるごとくなり。老母は今  
 はの聲の下、

「ノウ平太郎、縁が事を頼むぞや」といふが親子が一世の別  
 れ、はかなく息は絶にけり。重る思ひに親と子が前後ふかく  
 に歎きける。様子をとつくと和田四郎後に立てせ、ら笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、ハ、ば、めはくたばる爺めは眼がつぶれたな」

「ムさういふは晝うせた街よな、目前母の仇敵覺悟ひろげ」

と云せも立す、

「コリヤ、ヤイ眼も見へぬさまをして、じたばたひろげば命が  
 ないぞよ。コリヤ、アノ鬨は出世の種とぬかすから、何者の  
 鬨、儼じや、有やうにぬかせ、ぬかさにやうぬも小忰も、今目前に  
 芋ざしじや」



「ヤぬかしたり、うぬらが手に合ふ某ならず、コリヤ〜緑よ  
刀を奥で取ってくる、此手をちやつと引てくれ」

「ヤイ〜其大小は引さらへ、爰におれがもつて居る、是がほ  
しくばサアぬかせぬかさゞ是じや」とひらめく刃先、目先は  
見へぬ眞の闇、こはい〜と緑丸、逃行く首筋引つかみ、

「サア小びつちよからさいなもか、但しはぬかすか、サア〜  
〜何と」と人質取たる手づめと手詰、

「エ、〜此目が明てほしいなア、南無權現様〜、お柳やい」  
「ヤアやかましわい、いつその事に此小忤、芋ざしにしてくれ  
ん」と段平逆手に取直せば、

「アレ〜」と泣聲に、今はたへかね手を合せ、

「ア、コレ申します〜、何を隠さふあの鬨聲は白河の法皇の  
と半分聞て、

「ム、〜よし〜、つい一言で済む事を、ソリヤがきめをこま  
す」と投やれば、親子が嬉しさ、縋寄り、溜息ほつとつく空に、鳥  
の羽音二聲三聲、雲間をさして飛で行。其隙に和田四郎鬨聲  
を小脇にかい込で、

「白状をひろいだ褒美、是をくらへ」

と切付る、かい沈んで利腕しつかり、

「コリヤどうじや、イヤうぬは眼が見へるかよ」



『オ、アレ〜〜〜蟻の這ふ迄見へるはふしぎ』

『ヤア〜〜〜ヤそんなら生ては置れぬ』と切込む刀引たくり池の深みへ頭轉倒尻引からげつゝ立たり。

『ヤアと、様強ふ成たの』

『オ、ぼんよと、はもふ目が見へるぞよ嬉しいか〜。何より大事は此御頭』としつかと渡す後の方這上つたる和田四郎腕をかためて切込むを心得鉄にてしつかと受留。

『斯目が明ば百人力盗人風情のおのれ等に刀を當るは双の穢れうぬに似合ふた鉄の双先老母が敵觀念せい』と打てかゝるをはつしと請け。

『ヤア盗人とは案外なり季仲の謀反に組し軍用金を集めん爲山賊夜盗は假の渡世鹿島三郎義連なり。こけ猿めらが命の宿がへ、一々そつ首ならべん』と廣言たら〜付入る早足こなたも弓矢は手練の若者請つ流しつ切結ぶ鎧を削る吹雪の空裏交りの雨の脚踏すれば踏とまり組つ轉んづいどみける。平太郎は多年の誠神や力を添ぬらん切伏せ〜乗かゝり老母の敵嬉しやと親子は骸踏付け〜嬉しさ限りなかりける。折からさつと冷風の身にしみ〜としみ渡り親子は顔をふり上れば影か有ぬか縁が母。

『ノウ平太郎殿御身多年の孝行と信心の功德により月日の



兩眼明かに、忽ち敵を討たるも、大權現の神勅なり、肌を守りを見給へ」といふ聲斗り聞ゆるにぞ、始てはつと心付誠にふしぎは此兩眼、眼前敵を討たるも偏に神の加護なるかと、懐中の守より、牛王取出しよく見れば、數多の鳥の影もなく、

「扱こそ大靈權現の不思議を見せしめ給ふかや、ハア〜有がたしく〜」と、肝に銘ずる折こそ有、又も羽音は悦び鳥飛つれ〜まのあたり、開きし紙は忽に、元の牛王と成にける。かゝる奇瑞を三熊野の牛王の威徳末の世に、門戸に押して盗人を防く守りぞ有がたき。早東雲の街道筋木やり、囃子で地車の轟く音ぞいさましや。和歌の浦には名所がござる、一に權

現二に玉津島三に下り松四に鹽釜よ、ヨイ〜ヨイトナ。俄に車地にすわり、ゑいや聲して人歩共、おせ共引け共一寸も先へ行ぬぞふしぎなる。警固の武士進の藏人、

「さはぐな者共、思ひ當る事こそ有、せくな〜」と制する所へ、身ごしらへして平太郎、縁をつれて出向ひ、

「扱こそ此木の動かぬは、目前親子恩愛の別れをおしむと覺たり、妻が靈をもいさめる爲、何卒綱を此忤に、引させて給はらば有がたからん」と願ふにぞ、

「ホ、さこそ〜、某もさは存ずる所、左様ならば此柳、新宮の濱先まで、跡は海手を流さん」と、錦の袋を手に渡し、



「御頭を是に包まれて、跡より登り給へかし、我は先立ち法皇へ此趣を奏聞せば、曾根の家を引起し、父の敵時澄折を以て某が宜しう手引仕らん、イザ御用意」と進れば、

「ハ、ア、忝し」と一禮のべ、縁諸共立かゝり、木やり音頭は父が役、かざす扇もしほれ聲、むざん成かな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる其縁子が、ヨイ、ヨイトナ。

「こりやおれがかゝ様か」と綱引すて、わつと泣すがり、歎けば、爺親は涙に聲も枯柳引ば引るゝ、恩愛の縁よくと夕べまで、いとしがつたる老母さへ、道の街に葬むらんと、かきいだ

きたる孝の道、忠義に厚き藏人が、いさめて歸る都の土産、柳と柳とちぎりたる、連理がへりや楊枝村、女夫坂とて言傳ふ、棟の由來の因縁を語り傳へて、いちじるき。



### 平太郎住家の段註釋

〔岩代の結び松〕 松の精が人間と契りを結んだといふ傳説が奥州岩代にある。「得も岩代」とは言ひ得ないといふ言葉懸けたのである。

〔縁子〕 幼子。柳の葉の縁と小兒の名の縁とを懸けてあるのだ。

〔自〕 みづからとは私といふこと。これは上流の婦人でなければ使はなかつた言葉であるが、お柳は柳の精で、普通の女でないから「みづから」と云つても可笑しくはあるまい。

〔季仲〕 公卿の名。この季仲は謀反人である。

〔足緒〕 狩獵に用ゑ鷹の足に結び付てある紐。

〔執着〕 ある事に深く思ひ込むこと。執念と同じ。

〔非情の草木〕 草や木は人間のやうに喜怒哀樂の情がないので、それを非情といふ。



〔安倍の童子〕 安倍の保名の子。母は信田の森の狐である。この童子は後に安倍の晴明といふ名高い人になつた。

〔信田の古栖〕 信田の森は和泉の國にある。そこに栖んでゐた狐が「葛ノ葉」といふ女になつて安倍の保名と契りを結び、男の子をまうけたといふ古い談がある。

〔野干〕 やかん。狐の異名。

〔一字〕 一つの寺、又はお堂。

〔妙なる法〕 有難い佛の教へ。

〔玉きはる〕 魂極るといふ意味で、「命」といふ詞の枕である。

〔六字詰〕 連りに念佛を唱へること。南無阿彌陀佛の六字を唱へるので、六字詰と云つたのである。

〔しごだめん〕 盗み取らふ。

〔大だら差足〕 だんびらを差してゐるのと差足とを合せて言ひ表はした言葉。

〔山家のとろく〕 山家住ひの者を蔑んでいふ。

〔仕物〕 堀出し物。

〔のつかのか〕 大跨に歩くのを形容した言葉。

〔鮫は鼠がまだ外に〕 刀の鮫鞘は鼠が食つてゐない、まだ外に何かあるだらふ。

〔釣おまへ〕 釣り燈籠。「御明し上げた——」。

〔ぞゝがみ〕 何となく怖ろしくなつて惣毛立つこと。

〔猿くゞり〕 猿を括つたやうに手足を一つに縛ること。

〔滑の溜り池〕 古池で溜り水がぬら／＼してゐるので滑といつたのである。

〔宙宇〕 中有と書くのが正しいのである。中有とは佛教の言葉で、冥途と現世との間をいふ。こゝでは只だ「あてどもなく」といふ意味に使つてある。「宙宇をうろ／＼と」。



〔繼〕 きづな。情愛。

〔三熊野〕 熊野権現の三社。

〔鎬〕 刀のむねに高く聳えたる部分。激しく切合ふことを鎬を削るといふ。

〔午王〕 昔、祇園、八幡、熊野其他の社寺より出した牛王寶命又は牛王寶印と記したる護符。

起誓に用ゐる又は門の上に貼つて災を避る呪ひにした。その御符には烏點で文字が書いてある。

〔木やり囃子〕 重い材木を多勢で押して行くのを木遣といふ。その人たちに勢を付ける爲、歌を詠ひ、囃し立てるのである。

〔地車〕 極く重い物を運ぶ車。高さ低くして、四輪の車を付ける。

〔さは存する所〕 さうで有ふと思つてゐた。

〔棚と柳〕 棚の葉は竹ノ葉のやうに硬く尖つてゐるので、柳のしな／＼したのと取合はせて、平太郎夫婦のことを云つたものであらふか。

〔連理がへり〕 一つの樹の枝と他の樹の枝と結び付いたのを連理といふ。それで男と女と契り  
を結んだのを連理といふやうになつた。平太郎と柳とは夫婦の契を結んだけれど、もとの  
柳に返つたので、連理がへりと云つたのである。

〔楊枝村〕 つま楊枝は多く柳で作るから、その縁でかういふ地名を付けたものか。



解附  
古本義太夫名曲全集

卅三間堂棟由來

解題

この淨瑠璃は寶曆十年十月大阪竹本座で上演した「祇園女御九重錦」の三段目の切で、作者は若竹笛射、中邑阿契の二人である。この原本は延寶九年に宇治加賀掾が書卸した「熊野權現」の改作で、山本河内掾の作「卅三間堂棟由來」である。併し現行はれてゐる「卅三間堂棟由來」は近年竹本綱太夫が手を入れたもので、丸本とは少し違つてゐる。

大體の骨子は佛教思想から來たもので、草木も人間も同じ様に成佛するといふのが觀み所である。



熊野の浦に平太郎といふ百姓がゐた。元は北面の武士であつたが、内亂のため世を避けて、浪々の身となり、母を伴ひて紀州熊野ノ里に佗しく暮してゐる内、ふとした縁でお柳といふ妻を迎へ、二人の仲に男の兒を設け、縁といふ名を付けて、一家睦まじく其日を送つてゐた。

縁が五つの年であつた、この楊枝村に巨きな柳の樹がある、それを都からの御用で、俄に切崩すといふので村中は色めき立つた。それは何ういふ譯かと云ふに、白河法皇の御病氣が重くその御祈願所に一字を建立することになつたが、それには長さ三十三間の棟木を上げねば成らない、それも柳で無ければ成らないので、國々へ觸を出して物色さした處、やう／＼見當つたのが熊野の浦の柳である。

然るに此の噂がバツと立つと、平太郎の妻は急に驚き出して、身も世もあられぬほど歎き悲しんだ。實は此のお柳といふ女は人間ではない、お堂の棟木にならふといふ其の柳の精なのである。

今から數年前のこと、この邊へ鷹狩に來た一隊の人数が有つた。それは季仲といふ公卿の一行である。ところが何う過まつたものか鷹の足緒が柳の枝に絡んで何としても脱れなくなつたので、仕方がないから切崩せと云ふのでワイ／＼騒いでゐる處へ通り掛つたのは平太郎で、こんな巨きな木を枯して了ふのは不憫だと思つて、只だ一矢で鷹の足緒を切つて放したので、柳の木は無事に助かる事が出來た。

草木とは云へ如何にも嬉しく思つたであらふ。何卒して此の恩に報ひたいと思ひ、潜かに女の姿となつて平太郎と契りを結んだのが此のお柳なのである。それが今話したやうな譯で、通れ難ない運命になつた。

お柳はその譯を話さふとしたが、つひ言ひそびれてゐた。然し最早やがて自分の命はなくなるのである。人夫共はもうドシ／＼斧を打込んでゐるのである。お柳はヂツとして居られなくなつた。そつと枕元へ來て子供の事をくれ／＼も言ひ置いて、掻き消すやうに見へなくなつて



了つた。

夢ともなく現ともなくその話を聞いてゐた母子の者は始めてお柳の身ノ上が分り、今更嘆き悲しんだけれど、これも宿世の縁と諦めるより仕方は無かつた。縁はまだ頑是ない小兒の事であるから、只だ母を慕ふてウロ／＼捜し廻るので、せめて一目なりと名残を惜ませてやらふと思ひ、縁に手を引かせて雪の降る中をとぼ／＼と歩いて行つた。平太郎は較や以前から雞眼に罹つてゐたのであるが、夫婦とも談し合ひで老母には内所にしてゐたのである。

老母は佛前に燈明を上げて頻りに念佛を唱へてゐると、賊が入つて来て其處ら邊を家探して一つの燭體を見付け出して、これは何だといふ。これは去るやんごとない方の御頭で、平太郎が出世をする種であるから、何と云つても口を開かなかつたので、果は細引で吊し上げて、責め折檻をしてゐる處へ、平太郎が戻つて来たので、慌て、逃るはずみに綱が切れて老母は池へ落ちて了つた。

縁は祖母の死骸を見付つて、平太郎と共々ヤツとこさと引上げて、種々介抱をしたので何うやら息を吹返したものの、後々の事を言ひ終つて、つひに果敢なくなつて了つた。平太郎の嘆きは一通りて無かつた。

そこへノツソリ出て来たのは彼の泥坊である。此奴執念深い奴で、目の不自由なのを好い事にして平太郎父子を脅し付けて、誰の燭體だか其れを云へ、云はなければ斯うするぞと云つて縁丸を芋刺にしようとしたので、平太郎は耐り兼ねて、本當のことをいふ。

其時、鳥の聲がした。夜が明けたのである。兩眼忽ち明らかになつた。賊は驚いて切てかゝる。此奴、尋常の賊でない、鹿島三郎義連と云つて、逆賊季仲の與黨である。二人は根限り闘つたが、遂に平太郎のために切伏せられて了ふ。

熊野の浦を木遣り囃子が賑やかに通る。かの三十三間の巨きな柳は地車に乗つて、新宮の濱へ曳かれて行く。その綱を引いてゐるのは痛いげな縁丸である。父は涙に咽びながら音頭を取



328

3

295

巖本夫名曲全集

つてゐるのである。人夫共が曳くと車は一寸も動かない。糸が曳くとするくと動くのである。  
奉行役である進ノ藏人も思はずホロリとした。

六

(をばり)

昭和五年四月廿五日印刷  
昭和五年四月三十日發行

解説  
卅三間堂棟由來

不許  
複製

編者 玉井清文堂編輯部

發行兼印刷者 玉井清五郎  
東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇  
電話神田二三三三番  
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)



終

